シベリヤ捕虜記

蓮井　秀義

戦時中人の二倍は働きぬ
兵隊にとられたつもり
戦争にいったつもりで

戦時中、私は中国の東北部－旧満州遼陽市の日本人小学校の先生をしていました。昼は高等科の生徒を連れて、工場や農場に勤労奉仕に行き、帰ってからは家庭菜園や家庭教師、隣組のことなど、よく働きました。

サイパンがおち、沖縄がおち、戦況がいよいよ不利になった昭和二十年七月末、三十二歳の私に召集令状がきました。私が入隊したところは遠い所で、朝鮮のロシアに近い会寧という町でした。それまでいた部隊は南方の太平洋戦線に出動して、その後に入隊した私たちには、軍服も鉄砲もほとんどありませんでした。

入隊して一週間目の八月六日、ロシアは突然日本に宣戦を布告して攻撃してきました。当時ロシアとの間には中立平和条約が締結されていたので、ロシアは仲間だと思っていたのです。

私たちは武器を持っていないし、訓練も受けていませんから逃げるしかありません。南の方へ逃げて、司令部のあったピョンヤン（平壌、現在の北朝鮮人民共和国の首都）で捕虜になりました。北朝鮮ではロシア軍は大砲を撃って攻めてきたが、日本軍は大砲を持っていなかったから反撃はなく、戦闘はなかったと思われます。当時ピョンヤンでの戦闘は「停戦条約が成立した」と報じ、日本が無条件降伏をしたとはいっていませんでした。

その後「日本人は全員日本へ送り返す」と言われ、本当に日本に帰ると思い興南港から船に乗りました。その船は、日本海を東へは行かずに北に進んで、着いた所がシベリアでした。それからシベリア鉄道の貨車に乗せら

れ、トラックに乗せられ、山の中の小さな村の収容所へ入れられました。そこで最初のシベリアの厳しい冬を迎えました。その冬はテントで過ごしました。半年間は風呂も入らず着替えもしませんでした。

私は、森林伐採の仕事が一番長く、何十ぺんも転属したのでコルホーズ（共同農場）製材工場、れんが工場、土建の仕事などもしました。重労働や寒さは、それほど苦しいとは思いませんでしたが、食べ物が少なくて空腹には困りました。

タンポポもヨモギ、ハコベもみんな食う。
蛙も蛇も大ねずみも

春の野に遊べる牛のうらやまし
食うものばかり牛の世界は

飢えて死んだ友を埋めんと穴を掘る
シベリアの土堅くなれり

友だちに着物はがれてシベリアの凍る
大地に友は埋めらる

飢えて死んだ仲間の死体を埋めにいく。日本人捕虜が、死体の衣類をはぎ取ってロシア人とパンを交換したのです。大部分の日本人捕虜は昭和二十三年の冬までに帰国しましたが、残された私たちは四度目の冬を迎えました。この四度目の冬は今までとはすっかり違った冬になりました。恐怖の政治教育、洗脳教育が行われたのです。半年の間にみんな赤色に変わりました。

天皇のために死なんと言し兵
転がり身早くロシアにたたえる
人間はかなしかりけりカメレオン
まわりの色に似せて色づく
アメリカとロシアおかしの噂立ち

捕虜の帰国は無しと思わる。

当時、ロシアとアメリカとは冷戦状態にあり、それは本当の熱い戦争になる直前だったようです。（やがて昭和二十五年には朝鮮戦争になりました）ロシアは残留日本人捕虜を、日本を占領しているアメリカ軍、それに従

属する日本政府と戦う戦士として帰国させようと考えました。連日連夜、反アメリカの教育、ロシア賛美教育が行われました。妻や家族の写真を見ていても反動と言われ、集会のとき前へ出されてつるしあげられました。「日本へ早く帰りたい」と言った者も反ロシア主義者としてつるし上げられました。密告がたたえられるので仲間が恐ろしくなりました。

ロシアに残留したいと嘆願書を出して、ロシアの機嫌をとる人もありました。私たちは、感謝決議文に署名してロシア政治部員に提出しました。これは今もハバロフスクに残っています。

「ロシアに捕虜になったお陰で、資本主義の悪夢から解放され共産主義の良さを知ることができた」と感謝したのです。

また、帰国後は直ちに共産党に入党するい う誓約書も書きました。収容所同士の生産競争をして伐採成績も倍増しました。

昭和二十四年七月になって、冬の間停止していた帰国が再開されました。

私の収容所にも帰国命令が来ました。ところが私は整理班になり後始末をするため残されました。

八月になってやっと、ナホトカ港の収容所へ入りました。そこで一か月間また再教育があり、九月中旬、大井川丸という日本の貨物船に乗ることができました。

舞鶴引上寮に五日間いた間に、日本政府もいろいろこの暴力集団に対策を立てました。健康調査という名目でシベリアで編成して来た集団を分解して指揮者と団員を離してしまいました。

また、故郷から呼んで私たちは家族に手渡されました。

満州に残した妻子は生きてあり

舞鶴に来てわれを迎える

私が召集を受けて家を出た時、一歳だった長女と戦後生まれた次女が、故郷の四国から

妻と迎えに来てくれました。私は妻や子が無事に帰国していることを、初めて知りました。妻は家が没収になったので、転々と家を変わり、よその家で子供を生み、その子を連れて帰国していました。

日本がこれほどまで思わざりけり
負け時には、今は誰よりも頑健に生く

シベリアでは下痢つづきで、夜は二時間毎にトイレに行っていた半病人の私が、帰国して四十六年、八十二歳で元気でいます。

シベリアのことを思えばつらいこと、苦しいことはこの世にはなし。

一ルーブルの金もロシアから支払われなかったので、五年間一度も買い物というものをしませんでした。

尻をふく紙のなければ下痢男
シベリアの冬　零下五十度

山奥の捕虜収容所には、古新聞も古雑誌もありません。下痢がずうっと続いていた私は本当に困りました。

戦争に負けた外地の引き揚げ者
住む家もなし、食う物もなし
アメリカに占領されている日本
ロシア帰りには、仕事とざさる
シベリアで洗脳教育を受けた捕虜
帰国はしたが、働く所なし
私は友人、先輩の奔走で学校に復職できた
のは一年後でした。